【資料紹介】

小山正太郎資料（四）

―遊峡録艸稿　庚辰夏日　小山　正太郎　記―

解説・続

金子一夫

一　その後の発見

本誌第十号（平成十五年）に小山正太郎筆記「遊峡録艸稿」原文及び現代語訳を発表した。その解説で、本旅行で描いた小山の作品は一点しか見あたらないとした。しかし、その後、小山正太郎資料中に同旅行での制作と推定できる素描がさらに八枚発見された。また、小山達が歩いたスペクタクル的前半の路程の現況を調査確認した。その他にも様々な事実が判明したので、それらを踏まえ甲府到着までの同旅行前半の解説続編を認める。

二　大河内信矼と出発日

同行の大河内信矼（おおこうち・のぶかた）が、出発前に出した小山正太郎宛葉書も小山資料中にあった。（図一、二）

（表）下谷御徒町二丁目四十二番地　小山正太郎殿
　　小梅村百十番地　大河内信矼
　　消印：東京／一三・七・二五・と

（裏）只今浅井君ヨリ来書ニテ明日ハ早発ニテ午前三時十五分頃馬車会社ェ来集トノコトナレハ昨夜御約束ノ如ク推参之義ハ御違約可仕候　雨天ニテ七時頃晴レヘキ見込アレハ六時頃推館可仕候

七月廿五日

大河内信矼は小山とよく一緒に行動した人であった。大河内正質や正敏の縁者であろうと想像されたが、経歴等は不明であった。その後、大河内信矼は、譜代大名の大河内本家伊豆守家の分家である伊勢守家（小梅家）第十一代当主であり、「のぶかた」公と読むことがわかった（註一）。小山正太郎資料中に「N.Okothi」との署名のある水彩画があり、それが大河内信矼の作品と思われる（図三）。信矼は、幕末に銃隊奉行を務めたことのある八木但馬守の次男で、明治十三年の時点で既に大河内家の養子になっていた。大正十五年二月一日に六十八歳で亡くなったそうである。それから計算すると、一八五八（安政五）年頃の生まれで、小山とはほぼ同い年である。二人がどう知り合ったのかはわからないが、気が合ってよく一緒に行動していた。

この葉書の出現によって、旅行日程に関して新たな問題が出てくる。

この葉書が七月二十五日に書かれて同日中に投函されたことは、文面の日付と消印から確実である。そして文面内容から翌二十六日が出発日である。しかし小山の紀行原文には二十四日に明日早朝　出発を約束したとある。それを踏まえると出発は二十五日である。この不整合をどうすべきか。解説者は、前解説

図一、二　大河内信矼　葉書　表・裏

を改めて二十六日出発を取ることにしたい。以下に理由を説明する。小山が紀行文中で日付を書いているのは、この七月二十四日と八月三日だけである。記述内容から日数を数えていくと一日足りなくなるので、前解説では小山が八月三日とした日は八月二日の間違いであろうとした。ただ　確証がないので、八月二日とはせず、その日は原文通り八月三日とした。しかし、出発を一日遅らせ、二十六日とすると、小山が八月三日とした日は、小山の書く通り八月三日となる。この整合性と大河内の葉書の日付消印及び内容を尊重したい。出発を約束した日を二十四日としたのは、小山の勘違いで、実際は二十五日であろうと推測する。小山は紀行を日記のように毎日、旅行中に書いたのではなく、備忘をもとに思い出しながらまとめたのであるから、相談日の日付を一日勘違いしたと推測しても、無理ではないであろう。

図三　大河内信矼「提灯屋」

三　旅行日程概観

出発を七月二十六日とした場合、次のような旅程となる。

七月二六日　神田→新宿→高井戸→布田→府中→玉川渡る→八王子→楢原村→川口村→小峰峠→秋川渡頭→五日市(泊)

同　二七日　秋川南岸→真光院(深沢村)→古机(小机)村→余日峠→久野→梅形嶺(梅ヶ谷峠)→日影和田→柚木→丹波川→御岳村→万年橋→小丹波村(泊)

同　二八日　誰沢→御祓(大滝)→氷川村→香地(河内)(泊)

同　二九日　鴨澤村→新道に入る→保之瀬→丹波山村(泊)

同　三〇日　芳野谷(地獄谷)→落合(泊)

同　三一日　(狩猟)→落合(泊)

八月　一日　雲峰寺→小田原→平野→大藤→七里→甲府柳町(泊)

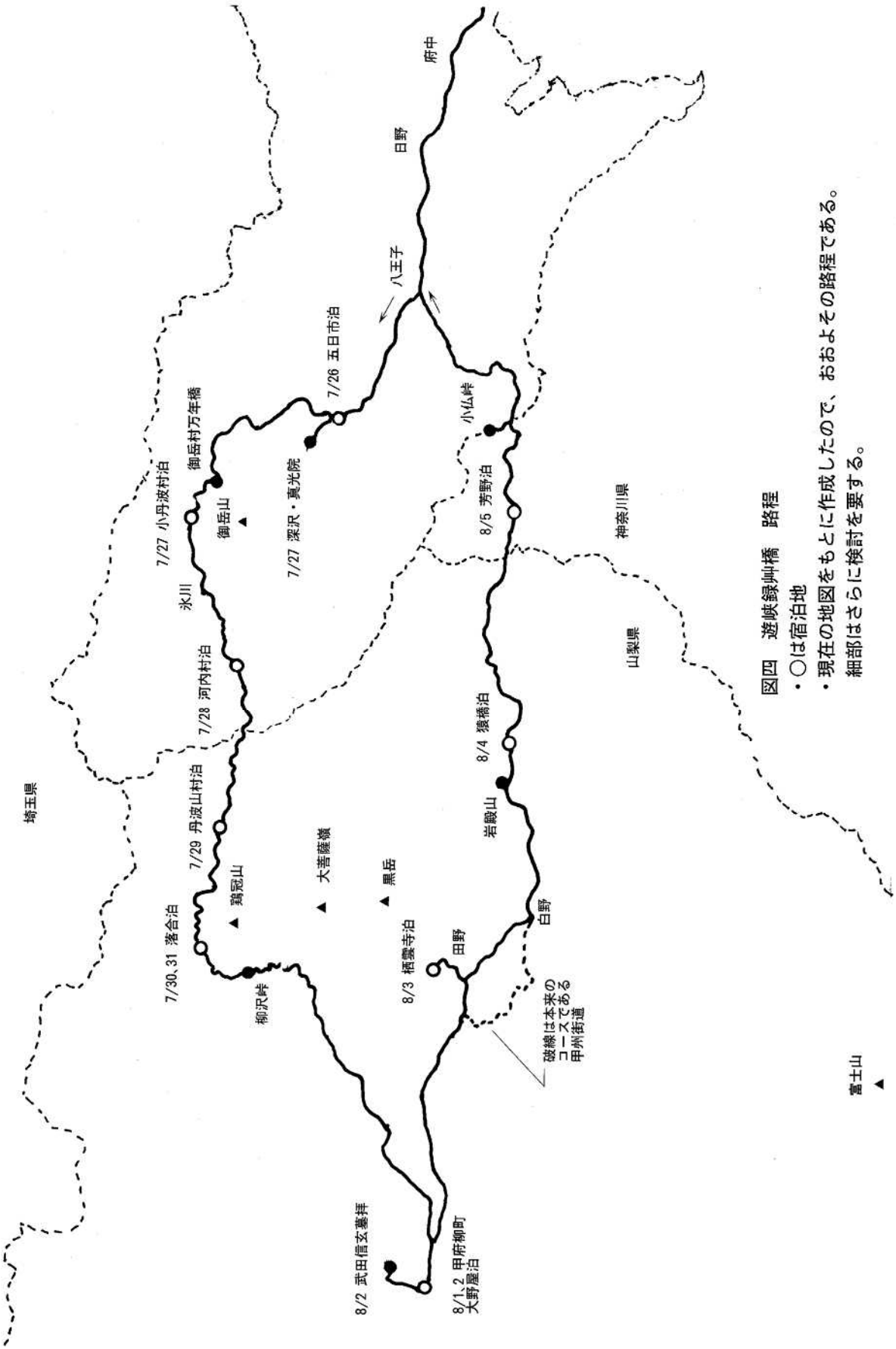
同　二日　大泉寺→武田信玄墓→古府中→甲府柳町(泊)

同　三日　石和→遠妙寺→日川→勝沼→徒歩で大善寺→鶴瀬→三日川→駒飼→篠子峠→初鹿野村→田野村→景徳院→木賊村・栖雲寺(泊)

同　四日　田野村→(山中踏破)→白野→初雁→花咲→大沢→岩殿村(城址登山)→強瀬村→(渡河)→猿橋(泊)

同　五日　鳥沢→犬目→野田尻→鶴川→上野原→境川渡る→芳野(泊)

同　六日　与瀬→小原→小仏峠に馬で登る→小仏→駒木野→小名子→八王子→日野→満願寺→府中→帰宅



図四　遊峡録艸橋　路程
・○は宿泊地
・現在の地図をもとに作成したので、おおよその路程である。
細部はさらに検討を要する。

四　七月二十六日

早朝に神田橋外の甲州街道馬車会社の馬車に乗って出発する。小山正太郎、浅井忠、大河内信矼、高橋源吉、印藤真楯の五人連れである。新宿、高井戸、布田、府中、日野と甲州街道を走った。八王子に着いて昼食を取る。馬車の終点が八王子なので、その後は歩いたと思われる。浅川を渡り、楢原、川口の二村を過ぎて孤峰（小峰）峠を登るとあるので、甲州街道ではなく、八王子を発してすぐに右折して秋川街道を行ったことがわかる。小山が百合の花を帽子に挿し同行者と軽口を言い合った小峰峠は、現在は車両通行止めになっていて、迂回して五日市方面にいくようになっている。小峰峠を下ると渡頭に出る。小山は浅川の上流と書くが、現在の地図で見る限り秋川の上流であると思われる。これを渡ると五日市がある。ここで投宿するが、蚤と酒客の騒音に眠れず、主人を呼んで叱りつけた。

五　七月二十七日（一）真光院

翌二十七日は宿を発した後に、秋川を渡って南岸で写生をする。そこでの写生と思われる素描が小山正太郎資料に残っていた（図五）。画中に山の手前に在る低い橋を歩いていく傘の人物がいて、画面右下に「秋川」と記されている。小山がそこで俄に雨が降ってきたので、下村へ向かったと書いているのとも符合する。画面右上にアラビア数字で「1」とある。つまり、この旅行で描かれた最初の作品ということであろう。この旅行で描かれたと推定した素描には、全て右上部に番号が入っている。欠番も多くあるが、数字順に描かれたことは確かであろう。これらの素描は該当地に触れるところで紹介する。

雨が降ってきたので小山達は霜村（下村、現在の青梅市梅郷付近）を目指す。現在、二五一号線と呼ぶ道を行くはずであったのであろう。しかし、秋川街道をかなり北上してから左折すべきところをすぐに左折してしまったらしく、深沢村へ迷い込む。そして真光院という寺に入り、道を尋ねる。出てきた僧は驚き、これより先は道が無いので戻るがよいと言う。さらに尋ねようとすると僧は奥に行ってしまう。この真光院は前解説でも触れたように、その隣が千葉卓三郎の「五日市憲法草案」が発見された深沢名生・権八の家である。小山に応対した

図五　小山正太郎「1　秋川」

図六　現在の真光院

僧は中島元澂と思われる。明治十三年当時は盛んに民権運動の学習活動が行われていた時期であったので、突然入り込んできた小山たちは警戒されたのである。

現在も秋川街道から川沿いの細い道を一里くらい入った同地（現・あきる野市深澤）に真光院はある（図六）。同寺は東照山真光院と言い、臨済宗建長寺派に属する。現在の本堂は天保十五（一八四四）年造営とのことである。小山達も同じ本堂を見たことになる。なお、深沢家跡には現在、土蔵と門だけが残っている。東京都指定史跡として「深沢家屋敷跡」と刻字された石柱と説明板が立てられている。

小山達は来た道を戻り、古机村（現在の日の出町小机か）から余日に行く。現在の地図や文献等に余日は見出せなかった。そこの川で水浴をしたのであるから、平井川の岸辺と思われる。小山達はそこから余日峠を越えて久野に出る。久野も実際の地名からすると大久野（おおぐの）と思われる。そこで小山と浅井が写生に夢中になっているうちに、他の三人は農家で食事をとってしまう。小山と浅井はそれを知らず、三人が先行していると思い空腹のまま急ぎ梅形嶺を登ると書く。これは現在の梅ヶ谷峠であろう。現在は坂道とはいえ舗装された直線道路が通っているが、当時の小山達は迷って霜村より手前の日影和田に着く。これは玉川（多摩川）南岸の現・青梅市和田町である。北岸の日向和田は今も町名として残るが、日影和田は和田町となった。小山と浅井は日影和田から左折して南岸の吉野街道を西へ進む。北岸の道が青梅街道である。小山と浅井は吉野街道を進み柚木（ゆぎ）村（現・青梅市柚木）に着く。二人はそこで空腹に耐えられず、店に入り麺を食べていると、三人が追いついた。そこから再び五人の旅となる。

六　七月二十七日（二）　万年橋

五人は丹波川（玉川）の景色を楽しみながら進む。この辺りは御岳渓谷と言い、景勝地である（図七、八）。現在は両岸に観光遊歩道が設けられている。御岳村に着いた小山達は、左折すると御岳への登山道となるところを右折して万年橋を渡る。この橋は橋下が十丈（三〇米）くらいあるうえ、幅が狭く渡るとゆらゆらしたと書く。山田早苗『玉川泝源日記』にも沢井村の箇所に次のように記されている（註二）。

「ここにては両岸高く、谷底に流れみゆ。万年橋（払沢の万年橋と云）といふが、橋柱はあらで、玉川に高くかかりたり。前に渡りたる日向和田の万年橋より渡りも短く、いと古く、こぼれたる所も見ゆ。渡るにたゆたひ、危しとおぼゆ。」

引用中にある日向和田の万年橋は、同書の少し前で触れられている。青梅街道を東京から来た御岳神社参詣客は、日向和田の万年橋をわたり、吉野街道を通って御岳山に行った。植田孟縉『武蔵名勝図絵』にも、万年橋と見出しのついた記事が二つある。日向和田村の項にある万年橋の記事は次のようである（註三）。

「万年橋　下村橋とも唱え、あるいは永久橋とも号せり。日向和田と二俣尾と両地の堺にあり。街道附きにて、玉川通路の橋なり。両岸より大木を投げ渡して、柱なく組み上げたり。長さ十九間、幅三尺余、水際まで四丈許。下村、日影和田、二俣尾、日向和田と四ヶ村普請なり。常に牛馬を通ぜず。洪水の砌も、通行の患いなし。

玉川に万年橋三ヶ所あり。沢井村にてつくれるを第一とす。この橋は次とす。御嶽山参詣のもの多くは青梅村にかかり、夫よりこの橋を

図八　御岳渓谷　御岳橋遠望

図七　御岳渓谷

図九　御岳橋

橋の向こうの
突き出た岸に
古い橋の跡が
ある。

越えて、下村、柚木、御嶽と行くを順序となす。」

山田早苗が記した日向和田の万年橋の後身が、現在も日向和田と二俣尾の境にある神代橋である。ただ、江戸時代の万年橋は、現在の神代橋より一二〇メートルほど上流にあったという（註四）。しかし、小山達は御岳村に来てから万年橋を渡ったのであるから、日向和田の万年橋ではなく、沢井村のそれである。沢井村は御岳村の対岸にある。植田孟縉『武蔵名勝図絵』は、沢井村の万年橋について次のように記す（註五）。

「万年橋　或は永久橋とも云ふ。玉川洪水にても通行の患いなし。玉川に架する三橋の第一橋なり。この外はみな是より劣れり。沢井村、御嶽村の両村にて造る。長さ廿一間、幅四尺。両岸より丸木を投げ出して、その先を突き合わせて架せる橋なり。」

植田の記す沢井村の万年橋が、山田の記す払沢（ほっさわ）の万年橋である。檜原村に「払沢の滝」がある。しかし、それは近くとはい

え全くの同名異地である。現在の御岳橋南岸付近は御岳一丁目ではあるが、小字名は払沢（ほっさわ）である。バス停名も払沢である。それゆえ、御岳橋付近に沢井村払沢の万年橋があったはずである。現代の諸書に御岳橋は江戸時代「高橋」と言い、大正八年建造の吊り橋が昭和四年に現在の鉄製アーチ橋に再建されたとある。江戸・明治時代に万年橋と称したとの記述がない。土地の人に聞くと、御岳橋の上流側五〇米くらいの所に橋の跡があるという。実際に行ってみると確かに、それらしき跡があった。対岸で土地の人に聞くと、この辺りに吊り橋があり何度も流されたという。また、現在の御岳橋に接した下流側に煉瓦風の橋の基礎らしきものもあった。これが大正八年建造の吊り橋跡であろうか。いずれにせよ、この付近に沢井村払沢の万年橋があったことは間違いない。現在の御岳橋は揺れることはないが、アーチ形に万年橋の面影が残ったことになろう（図九）。

二つの万年橋はわかったとしてもう一つの万年橋は、確認できなかった。神代橋よりずっと下流の青梅市街地近くにも現在、万年橋がある。しかし、これは明治三十年に架けられた木橋が前身で、それ以前、住民は近くの渡しを使っていた。つまり江戸時代の万年橋の後身ではない。ちなみに、「万年橋」という大下藤次郎の水彩画がある（青梅市立第一小学校蔵）。明治三十六年の作である。描かれた川面や河原は、ゆるやかである。それゆえ、御岳橋の前身ではなく、この明治三十年に架けられた木橋を描いたのではないかと思われる（図一〇・註六）。

とりあえず、小山達が渡った万年橋が現在の御岳橋付近に在り、江戸からの御岳参詣者が渡る万年橋は現在の神代橋の近くにあったことを確認して、我々も次に進もう。

小山達が万年橋を渡って北岸にいくと、そこは甲州街道沿いの小丹波（こたば）村となる。そこで投宿する。現在、古里（こり）という集落がある。宿もその辺りにあったのであろう。

七　二十八日　河内泊　馬鈴薯

小山は誰澤を過ぎて御祓（みはらい、みそぎ）という巨瀑を見たと書く。この誰澤という地名は確認できなかった。沢の付く小字はたくさんあり、現在も棚沢、海沢（うなさわ）という地区名が残る。それらの誤記かもしれない（註七）。植田孟縉『武蔵名勝図絵』には御嶽山の麓にあるとして「御祓(みはらい)滝　清の滝とも号す。参詣の輩、ここにて垢離をとりて登山するゆえ、垢離尽きの滝とも云。是より険路の山道を登る」と記されている（註八）。しかし、御嶽山の麓は昨日に過ぎた所なので、それとは違うであろう。現青梅線の古里駅と一つ先の鳩ノ巣駅間には小さな滝がいくつかある。特に棚沢地区の「不動の滝」（註九）や鳩ノ巣駅近くの「昇竜の滝」は高さが一〇メートル近くある。小山達は雨後で水量の増したどれかを巨瀑と見たのであ

図一〇　大下藤次郎「万年橋」

図一一　小山正太郎「6　氷川村口」　　図一二　現在の氷川橋付近

ろう。なお後者は「鳩ノ巣渓谷」という景勝地にある。

そして。小山達は氷川村に入る。小山資料に、道の両脇に民家数軒と大きな樹を描いた「氷川村口」という素描がある（図一一）。右上部の番号は「6」である。それゆえ、前出の素描「秋川」との間に四枚描いたはずと推定できる。植田孟縉『武蔵名勝図絵』所収の「氷川郷氷川村／多磨川日原川落合の図」（註一〇）には玉川に合流する日原川（にっぱらがわ）を越えてから民家が在る。「氷川村口」もその辺りを描いたのであろう。現在の氷川橋を渡った辺りの光景であろうか（図一二）。この付近の人に聞くと、昔の橋は現在の橋の下流側にあり、現在の日原街道に沿ってある細い坂道が旧道だという。『武蔵名勝図絵』所収の氷川村の図中の道も、確かに日原川を渡って坂道を少し北上してから氷川村の方へ右折しているように見える。現在の氷川橋は真っ直ぐ集落に直結するように架けられている。

氷川村を過ぎてから二軒家の一軒で黍餅と稗飯を食べさせてもらう。小山はそれらを見たこともなかったと記す。小山は長岡藩医の長男で裕福な都市住民であったので、米飯しか食べたことがなかったのであろう。そこから三里ほどいった香地（河内）で泊まる。切傷に効くという温泉があった。宿で浴後に馬鈴薯を食べながら、人々がこのような絶景を賞しないことについて談論する。

小山は、翌日の鴨沢村の記述で、ここの住民も米を食べない民で、畑には馬鈴薯が多い。そして、自分の故郷越後では甲州薯といっているのはそのためであると記す。山田早苗『玉川浜源日記』は、天保十二年八月に訪れた丹波山の項で、この地の馬鈴薯に触れている（註一一）。それに関する校訂者註も興味深いので、併せて引用する。

「又、小河内のあたりにて、清左右衛門芋という丸き芋あり。予はじめて見れば、焼きて出したるを食い試むるに、味淡く、里芋よりうまみ劣れり。この芋、専ら畑に作りたる見ゆ。茎の高さ三尺ばかり、葉は藤に似たり。花は紫にて、桔梗に似たり。八月中旬の頃、花咲くなり。

校訂者註　これは馬鈴薯である。天明（一七八一～八九）の頃、甲州石和の代官中井清太夫が救荒作物としてはじめて栽培を奨励したので、甲州では清太夫芋と云、それをなまりてセエダ芋、又はただセエダとも云。清左右衛門芋とは早苗の誤聞か。又、多摩郡各地ではいまツル芋とも云。（中略）旧暦八月すぎに花咲くとは、二度芋、または三度芋と称して、一年二回以上の収穫ありしことを物語る。

この河内付近の川筋と道筋は、非常にきれいな景色であったらしい。しかし、昭和十二年から始まり、昭和三十二年に竣工した小河内ダム造成によってできた奥多摩湖に沈んだ。現在の道筋の百メートルくらい下の湖底に元の道筋があるという（註一二）。川筋に沿って道筋があるので当然であるが、平面図的にはちょうど湖の中央線が道筋・川筋になる（註一三）。

八　七月二十九日　丹波山村泊

河内を出発してすぐ鴨沢村（現・丹波山村鴨沢）に着く。ここから山梨県となる。甲州裏街道は、その手前を左折して小菅村、大菩薩峠と進む険しい道であった。小山達は明治十一年に開かれた丹波川沿いの新道を進む。「入甲里余将入新道之口」「新道第一」と画面に記された二枚の素描がある（図一三、一四）。右肩の番号は「12」、そして「13」である。新道直前の景色と新道に入ってすぐの景色を描いたものであろう。前者の素描から川のすぐ近くに道があることがわかる。現在の自動車道は、当然ながら川面よりかなり高いところを走っている。河内から鴨沢、丹波山、そして大菩薩峠へと至る丹波大菩薩路が江戸時代にあって利用されていた（註一四）。おそらく丹波山村までの新道は旧道の丹波大菩薩路を改修して一部としていたのではないかと推測する。いずれにしても新道は岩壁を切り通した桟道で決して生やさしい道ではなかった。小山達は石を落として砕け散る音で谷の深さを知る。

図一三　小山正太郎「12　入甲里余将入新道」

図一四小山正太郎「13　新道第一」

小山は約二里程進むと三冬夜村という村があったと書く。この村名は、現丹波山村の人でも知らないので、鴨沢から二里、丹波山集落まで一里ということから推測すると、保之瀬（ほうのせ）村を小山が地形から漢文的に形容したのではないかということであった。

丹波山村に着き、そこで投宿するつもりで風景写生をする。住人は驚き、遠巻きに、あるいは樹に登り、あるいは屋根に登って小山達を見ている。日が落ちて一軒に宿を乞うと糸繰りしていた婦人に断られ、さらに強く乞うと西へ五、六軒行った大きな家に頼めと言われる。その家に行って乞うと、応対した婦人は、帽子を頭に三脚を腰につけた異様な同行者が後から一斉に入ってきたので驚いて奥に入ってしまう。やがて連れて来られた白髪の媼から泊まってよいと告げられ、媼が婦人達に指図するのを見て安心する。小山達は山家の情趣を楽しむ。媼からあなた達はこのような土地を見たことがないであろう。私達もあなた達のような人を見たことがないと言われる。小山達は同地を外界との接触を断った桃源郷のように感じている。住人は無姓で、泊めてくれた家は栄左、断った家は二右と名前で呼んでいるとも書く。

ただ、実情を調査してみると、記述とはやや違う面がある。外界との接触が少ないことは事実であるが、意図的にそうであった可能性がある。江戸時代、丹波山村は金の産出地であった。つまり、政策的にも外界から隔離・保護されてきたのであろう。そして丹波山村郷土民俗資料館の教示によれば、村の指導的人間は、頻繁に外へ出かけているとのことである。そして前解説にも書いたが、生糸は外へ出荷していた。埼玉県の方から買い付けに人が来ていたらしい。

そして調査の結果、栄左は無姓ではなく、守岡栄左衛門という同村の長であった可能性が高い。丹波山村郷土民俗資料館に、山梨県が明治十五年一月三十日付けで発行した同人宛の感謝状が所蔵されている。これは明治十四年の道路工事に同人が十円を差し出したことに対して、木盃一個を添えて感謝するという内容であった。守岡家は代々、村長を務めた家柄らしい。山田早苗『玉川泝源日記』の馬鈴薯に触れた記述の直前に、丹波山村の村長である守岡英蔵を何度か尋ねたこと、同家の庭の様子などが描写されている（註一五）。

そして、丹波山村郷土民俗資料館（以後、資料館と略記）の教示によれば、同家の女性も代々しっかりしていたとのことである。小山の記す白髪の媼の姿から然りと言うべきであろう。

さらに、守岡家はずっと後であるが、丹波山で最初の郵便局となっ

図一五　現在の丹波山村

図一六　守岡栄左衛門家跡

たこと、現在は誰も住んでいないが、その家が街道沿いに残っていることを教えられた。その家の現況写真を載せておく（図一六）。門の左側の板壁の建物が旧郵便局である。門奥にある住居は、もちろん小山達が泊まった建物ではなく、建て替えられたものである。けれども、小山達はこの場所に在った守岡栄左衛門宅に泊まったのである。残念なことに守岡家は数年前に絶えてしまったらしいとのことである。

なお、二右は二右衛門の可能性がある。驚くことに、小山達よりも一年後の明治十四年七月十六日にアーネスト・サトウが甲州へ行くために丹波山に泊まった。『日本旅行日記』の同日の項に、宿の主人は弐右衛門といい、もう一軒、安太郎という宿もあると書いている（註一六）。小山達が通った明治十三年に宿らしき家は無かったのに、やはり通行客が増えたために宿も必要になったのであろう。

九　七月三十日　地獄谷

小山正太郎資料に「丹波／山家」と左下に注記がある淡彩素描があった（図一七）。小山がこの旅行以外に丹波山に来た事実は確認されていないし、右上に「17」と番号がある。以上から、宿泊した守岡家を描いた素描であるのに間違いないであろう。雑多な素描群に分類されていたので、前回解説執筆時には気づかなかった。この素描は一躍、雑多な資料ではなく、時期、場所、状況が判明する重要な素描になる。囲炉裏に二人、右手の土間縁に一人、同行者らしき人物が座っている。室内には、屋外から光が差し込んでいるので、出発日の朝の光景であろう。それゆえ、七月三十日の項に掲げた。

図一七　小山正太郎「17　丹波／山家」

図一八　小山正太郎「20　大菩薩嶺新道」

図一九　丹波渓谷

朝、媼にこれから先の路を尋ねると、老人はここで生まれ老いたのでどうして路を知るでしょうか。ただ、芳野（吉野）谷は奇と聞いていると答えた。また、出発時に草鞋を求めると、媼はこの地は米が無いのにどうして藁が得られましょうかと答えた。一行は芳野谷を目指して出発する。

ここでまた、小山は道に廃された旧道と近年開かれた新道があると記す。おそらく旧道とは丹波大菩薩路のことである。小山達は新道を進む。これは危険な大菩薩峠を迂回して丹波川沿いに進み、柳沢峠から甲府へ向かう道筋になる。丹波山出発後に小山達は風景を楽しむ。「大菩薩嶺新道」と記入された小山の素描が二枚ある。一枚は前解説で唯一残っていると紹介した素描で、右上の番号は「22」である。今回紹介するもう一枚は、右上に「20」とある（図一八）。番号から、前解説で紹介した「大菩薩嶺新道」より先に描かれたことになる。

小山の記した距離を合計すると三里余りで、芳野谷に着く。そこは一山全てが石で切り立った崖に、路が半ば空を通っているようで、脚下に遠山が漏れ見えるとある。開道して間もないのに落ちた人が三人いて、その白骨が未だ在るという。そのため官（山梨県か）は通行人を護る柵を作ったと書く。この「芳野谷」と記された淡彩素描が小山資料中に二枚残っていた。画面右上の番号は「23」と「24」である。

一枚は、柵のある芳野谷の入り口のような印象の素描（図二〇）。もう一枚は、大石が崖を落下していくところを崖上から同行者二人が見ている様子を小山が手前から描いたと思われる素描である（図二一）。芳野谷のすごさが伝わってくる。小山の紀行文中では、小山が写生するため柵を越えて崖を下ると、浅井忠と高橋源吉がついて来る。大河

図二〇　小山正太郎「23 芳野谷」

図二一　小山正太郎「24 芳野谷」

内信矼と印藤真楯が危険だと遠くから呼びかけるとある。それゆえ、がけの上に描かれた二人は大河内と印藤であろう。現在のところ、発見されたこの旅での素描はここまでである。

その後、小山は浅井とまた一つの谷に降りていき写生をする。この時の素描らしきものはなかった。他の三人は先に行く。

芳野谷は、現丹波山村住民の多くは知らず、一部古老の記憶の中にだけあるとのことであった。調査から帰った後の資料館の教示を踏まえると、知られていない理由は二つ考えられる。まず、戦後、丹波山村から先に林業会社がトラックによる材木運搬のために新たに開いた道が県道、さらに現在の国道になったため、小山達の通った道は使われなくなり、日常的に谷を見ることが無くなったからである。ただ、小山達が通った道は、岩が崩れたり変形して危険、あるいは通行不能の箇所があるとはいえ、今も残り、観光名所へとの声もあるとのことであった。もちろん、地元の案内人なしでの調査は危険と思われる。次に、この谷は吉野という村民が事故にあってから外部の人が「吉野谷」と呼ぶようになったらしい。村内に芳野姓はなく吉野姓しかないので、表記するとすれば「吉野谷」であろうとのことであった。もう一つの理由は、当事者の縁者も村内にいるであろうし、村民がその名を普通に使用することは憚られたと思われるからである。

資料館の教示によれば、吉野谷の場所には、いくつかの可能性があるとのことである。明治十一年に東京府役人の山城祐之が玉川の水源を調査した報告書「玉川泉源巡検記」に一ノ瀬橋手前の谷が吉野谷と言うと記されている（註一七）。しかし現在の丹波山村のある古老によれば一ノ瀬橋よりもっと手前の泉水谷、また別な古老によればかつ

図二二　現在の落合付近　　図二三　現在の柳沢峠

て大東橋という橋が在ったところが吉野谷と言ったとのことである。

一ノ瀬橋の所は現在、路傍に碑、崖には卒塔婆がある。「おいらん淵」と言われるが、もっと奥という異説もある。「おいらん淵」とは武田氏滅亡の折、黒川金山に宿所にいた多数の遊女が帰郷するにあたり崖に舞台を設けて宴を催した。金山のことが遊女達の故郷に知れるのを恐れた武田家臣が舞台を切って谷に落としたという伝説の場所である。また、流れ着いた遺骸を弔い供養する「おいらん堂」がずっと下流の丹波山村奥秋の川辺にある。ただ「おいらん淵」伝説は、あくまで伝説にすぎないと声もある。

小山達は芳野（吉野）谷を過ぎて一里ほどで落合につく。途中での一軒と合わせて七軒の村である。現在の落合地区も似たような軒数ではあるが、太い立派な舗装道路が通っていて、渓流での釣人が多い（図二二）。

さて先行した三人が食事をしていた一軒で泊まることにする。印藤真楯から途中であった犬を連れた猟師の話を聞き、小山は猟をしたいと言う気持ちが湧いてくる。主人に頼み、同行者も誘う。主人は猟師に交渉してくれることになったが、猟に行くのは小山と浅井で、高橋は帰途につき、印藤と大河内は先にいくことになった。

また、当夜の寂しさに、幼時に誦したという四篇の漢詩を記している。狼や鹿と関連させて夜を詠った詩で、いかにも地方の寂情にあふれた詩である。これらが誰の作かは未調査である。

七月三十一日　狩猟

小山と浅井は朝から猟師とともに山中、獲物を求めて歩く。半日歩いて一高山に登り、西南に富士山、南に大菩薩の嶺が見えたと書く。位置関係からすると、それは黒川山（鶏冠山）であろうか。昼食後に喬林の下を踏むと蛇が出てくる朽ち木を越えて歩く。獲物に出会い猟銃を撃つが不発であった。漁夫の二発目が尾に当たるが逃がしてしまう。その後、猿を見つけるが見失う。結局獲物は捕れなかった。猟師の家で休んだ後に宿に帰る。

八月一日

小山と浅井は朝早く出発し一里で峠に至る。これが柳沢峠である。現在の地図では海抜一四七二米である（図二三）。小山達は峠の家で

休憩した後、出発した。一里にもならないのに開けたところに出、さらに二里ほどで雲峰寺に出る。落合から柳沢峠、さらに雲峰寺まで、それほど苦労しないで行ったかのように書いているが、現在かなりの急勾配の上り下りであり、自動車でも大変な区間である。それ以上に前日までの行路が大変であったということであろう。前日までの行程区間が、小山達の通った道に比べものにならないほど整備されて、大変さが無くなってしまったのであろう。

小山は雲峰寺の門が路傍にあると書く。雲峰寺は現在の道路から奥まったところにあり（図二四）、仁王門も階段中腹にある。道筋がかつてとは違ってしまっていると思われる。同寺は裂石山雲峰寺（さけいしさん・うんぽうじ）と言い、寺伝では天平十七（七四五）年、行基の開創である。最初は天台宗であったが、そのうち禅宗に転じ、現在は臨済宗妙心寺派に属する。小山は、さらりと武田氏の軍旗二十余を蔵すると聞くと書いている。これは武田勝頼以下一族が天目山で滅亡した折、家臣が御家再興を期して納めたとされる。有名な「孫子の旗」いわゆる「風林火山」すなわち「疾如風徐如林侵掠如火不動如山」と書かれた旗、日本最古の「日の丸」、「諏訪神号旗」等が現在も保管されているという。また。小説家中里介山が『大菩薩峠』を執筆したところでもあるという。

小山は雲峰寺では門の基礎に立って麓の方を眺め小休憩しただけで、出発する。小田原、大藤を過ぎ、笛吹川を渡ると見るべきものが無いので人力車に乗る。現在の山梨市の万力か正徳寺地区あたりである。乗ったら眠ってしまい、浅井に何度も帽子が落ちそうだと言われながら甲府に着く。

柳町の宿屋富士野屋某に入る。柳町は現在の甲府市中央付近にあたる。柳町には、古くから本陣・脇本陣があったという。富士野屋の正確な位置は判明しない。ところで、富士野屋には大河内信矼と印藤真楯の足が痛いので先に帰るという書置きがあった。小山と浅井は愕然とするが、いたしかたなく二人は投宿する。こうして、小山達の旅行の冒険スペクタクル的前半は終了する。

旅行記の後半にも、小山と浅井の白野への山中踏破や岩殿山登攀など冒険的行為があるが、史跡や寺院を訪ねての歴史的感慨の記述が中心となる。それはそれで現在の我々にとって興味深いものであるが、旅行記後半の解説は次の機会にしよう。

図二四　現在の雲峰寺　　図二五　雲峰寺付近より麓を望む

註

一　大河内信矼については、東京都台東区池之端の潜龍山東淵寺の御教示による。東淵寺は大河内伊勢守家の家祖大河内信定によって寛永七年に開創された菩提所である。明治二十年に小山たちが東京府工芸共進会出品のため一緒に制作をしたところと『小山正太郎先生』の年譜にある。しかし、同寺は先の戦災のため灰燼に帰し、資料等全く残っていないとのことであった。大河内信矼の戒名は「幽閑院殿梅翁壽仙大居士」。なお、近代日本美術史に出てくる大河内正質は大河内大多喜家十代、その長男が大河内正敏で本家伊豆守家を嗣子となった。正敏の五男信秀が、信矼の嗣子となり伊勢守家第十二代となられたとのことであった。

二　山田早苗（稲葉松三郎・滝沢博校訂）『玉川泝源日記』（慶友社、昭和四五年）一三四頁。

三　植田孟縉（片山迪夫校訂）『武蔵名勝図絵』（慶友社、平成五年）五一六頁。

四　東京都教育庁生涯学習部文化課編『青梅街道』（同課、平成七年）六六―六七頁。

五　植田孟縉、前掲書、五二四頁。

六　土居次義「私の一枚　大下藤次郎『万年橋』」『みづゑ』第七八九号、昭和四五年、八二―八五頁。

七　「角川日本地名大辞典」編集委員会『角川日本地名大辞典13東京都』（角川書店、昭和五三年）一二一〇頁に旧小字名が記されている。それによれば、沢が付くのは小丹波村では広沢、旧棚沢村では桜沢、木名沢、寺沢、菱沢、鵯沢（くまたかざわ）である。

八　植田孟縉、前掲書、五五〇頁。

九　平凡社地方資料センター『日本歴史地名大系一三巻　東京都の地名』（平凡社、平成一四年）一二〇四頁。

一〇　植田孟縉、前掲書、五七〇―五七一頁。

一一　山田早苗、前掲書、一五〇頁。

一二　清水克悦・津波克明『多摩の街道　上　甲州街道・青梅街道編』（けやき出版、平成一一年）一四六―一四七頁。

一三　東京都教育庁生涯学習部文化課編、前掲書、附録地図参照。

一四　東京都教育庁生涯学習部文化課編、前掲書、八八頁。

一五　山田早苗、前掲書、一四九―一五〇頁。

一六　サトウ、アーネスト（訳）『日本旅行日記』（平凡社、昭和　年）一八二頁。

一七　山城祐之「玉川泉源巡検記」『多摩郷土史研究』第五四号、八八―八九頁。

謝辞

本稿執筆にあたり多くの個人、機関から御教示を受けました。特に潜龍山東淵寺、丹波山村郷土民俗資料館及び同館の魚田恵美子氏には大へん御世話になりました。また、青梅市立第一小学校には大下藤次郎の「万年橋」の挿図掲載を許可していただきました。御礼申し上げます。

〔かねこ　かずお／本学教育学部教授・所員〕